



第1回 ライプツィヒへ到着

3月26日、成田を発って約15時間後の現地時間夜8時ようやくライプツィヒへ到着した。雨が降る中、迎えに来てくれたライプツィヒ大学日本学科の学生のオリヴァー君の車で大学のゲストハウスに向かう。15分くらいでゲストハウスに着いた。荷物を置いてからオリヴァー君と食事に行き、部屋へ戻ってからすぐに寝た。これからいよいよ1年間のドイツでの暮らしが始まる。期待と不安が頭をよぎる。

今回のドイツ滞在は10年に1回まわってくる大学の特別研究期間によって実現した。今回ドイツでいちばんやりたいと思っているのは、まず第一に20世紀ドイツのもっとも独創的な思想家の一人であるテオドア・W・アドルノの、哲学・文学・歴史・芸術（とくに音楽）にまたがる超領域的・複合的な社会・文化理論および美学理論についての研究を行い、その成果を論文

にまとめることである。もう30年近くもアドルノを読みつづける中で、いくつか論文も書き翻訳も行ってきたのだが、ドイツ人さえ時にさじを投げるようなアドルノのテキストの難解さのために、まだ十分分かったという気になれないでいる。この機会にアドルノについての自分なりの考えをまとめておきたいと思っている。

だがそれと並んで、いやそれ以上に重要だと思っているテーマが二つある。

ひとつはドイツの環境思想の源流をさぐることである。ドイツが環境先進国であることはよく知られているが、それはたんに技術や政策だけの問題ではなく、背景にあるドイツの長い環境思想の伝統の問題としても捉えられなければならない。たとえばヘーゲルや詩人のヘルダーリンの友人だった哲学者のシェリングは産業革命の始まろうとする19世紀の初期に、自然を人間の支配や操作の対象などではなく、自ら産出するものとして、言い換えれば能動的な主体として捉えようとした。こうした「主体としての自然」という思想はヨーロッパの精神的伝統の中にしばしば現れる。17世紀オランダの思想家スピノザなどもそうした考え方の持ち主だった。シェリングは明らかにスピノザの影響を受けている。18世紀ドイツ最大の文学者であり科学者でもあったゲーテは自然現象一般を、生命体である植物の、種子から芽が出て葉が開き花が咲く一連の生成と変容の過程と同じようなものとして捉えようとした。ゲーテにと

って自然は有機的なものでありけっしてたんなる物質の集まりではなかった。ゲーテは近代的な物理学的自然観に異議申し立てを行うため、ニュートン批判まで行っている。

そうしたドイツの自然思想の伝統の中でとりわけ重要な意味を持つのが、19世紀から20世紀にかけて現れる生態学（エコロジー）である。それは基本的に生物の存在を環境との有機的相互関係の中で考えようとする。この考え方の代表者であったのが生物学者であり哲学者でもあるヤーコブ・V・ユクスキュルだった。彼の「環世界」という概念は生態学の出発点を表している。こうしたユクスキュルの思想は色々な意味で現代ドイツの環境思想の起点をなしている。さらには20世紀の環境思想においてもっとも重要な存在のひとりといってよいハンス・ヨーナスがいる。彼は次世代倫理の最初の提唱者のひとりであった。こうしたドイツ環境思想の源流について研究してみたいと思っている。

もう一つのテーマは日本である。ドイツからもう一度日本を見つめ直したいと考えている。その具体的な手がかりとして、「日本的、あまりに日本的な」思想家和辻哲郎の大著『倫理学』の詳細な解読を試みようと思う。とくに日本における「社会」と「共同体」の関係をこの本を通して考えてみたいと思っている。まだこちらへ来たばかりで本格的な着手には少し時間がかかり

そうだがこうしたテーマに1年取り組んでみたい。

ここでライブツィヒの紹介をしておこう。ライブツィヒはドイツ東部のザクセン地方の都市である。すでに16世紀には神聖ローマ帝国から自治都市に認定され、ザクセンの商都として栄えた。その頃の町の面影はライブツィヒのシンボルであるマルクトプラッツの旧市庁舎の建物（16世紀）から思い浮かべることができる。豊かな富は文化や芸術にも向けられた。富裕な織物業者たちが建てた織物会館（ゲヴァントハウス）には世界でも最古に近いオーケストラが併設され、現在まで数百年にわたる演奏会の歴史を刻んでいる。出版もライブツィヒの重要な産業だった。戦争前ドイツの重要な出版社の多くがライブツィヒにあった。

ゲヴァントハウスからも分かるようにライブツィヒはウィーン、パリ、ベルリンなどと並ぶヨーロッパの音楽の都のひとつである。マルクトプラッツの旧市庁舎の向かい側にあるトーマス協会はかつてバッハが楽長を長く務めた教会で、バッハはこの教会の日曜ごとのミサのために数多くのカンタータを書いた。この教会の楽長職（カントール）は現在でもドイツ合唱界最高のポストである。バッハ以後も作曲家のメンデルスゾーン、シューマンがライブツィヒで活動し、ヴァーグナーはここで生まれている。20世紀の名指揮者アルトゥーア・ニキッシュ、ヴィルヘルム・フルトヴェング

ラーはこの地のオーケストラ、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の常任を務めた。

ナチスの支配と戦争の時代、そしてそれ
に続く戦後のドイツの分裂の時代に、ライ
プツィヒは戦火によって町の中心部を破壊
され、さらに東ドイツに組み入れられ「社
会主義」体制の支配下に置かれた。193
3年から1989年にかけての66年間は
ライプツィヒにとってもっとも不幸な時代
であったといえよう。だが1989年ライ
プツィヒは不死鳥のようによみがえる。東
ドイツ政府の圧制に抗議する市民の月曜デ
モがライプツィヒのニコライ教会から始ま
ると、その動きはまたたくまに全土に広が
りついにベルリンの壁の解放、ドイツ再統
一へとつながったのである。ライプツィヒ
こそドイツ再統一の出発点だった。16世
紀以来の市民の伝統がそれを可能にしたの
である。

今ライプツィヒは見違えるように整備さ
れ、モダンな現代都市へと変貌しつつある。
だがその一方古い伝統や町並みも依然とし
て強固に残っている。その中で若者の失業
の問題、グローバリゼーションなど様々な
問題が町にのしかかってくる。それは日本
とある意味では同じである。これからそう
したライプツィヒについて、またドイツ全
体についておりに触れて報告してゆきたい
と思う。

高橋順一